

愛を知る人

宇宙旅行といえば、みんながロマンを感じますよね。二〇〇七年に設立したベンチャー企業「P Dエアロスペース」で、高度百キロの宇宙空間へ行って戻ってこられる「宇宙往還機」の開発に取り組んでいます。

普通のロケットは垂直に打ち上げる際に、乗っている人間に大きな加速度がかかる。目指しているのは、飛行機のように離陸した後、上空でさらに加速して「弾道飛行」と呼ばれる方式で宇宙へ行く機体。そうすると、

Love: 宇宙 緒川 修治さん 44 ◆名古屋

ロケットよりずっと乗客 乗りたいか、乗りたくないに優しい乗り物になりまいか」という話になってくるでしょう。まずは無

欧米では、すでに一般人の実験機を造って飛ばす。このロケットに近にするために、経済合

が現実になりつつあり、 憧れの宇宙をもっと身



理性をとことん追求するのが僕の役割だと思っ

これまでみたいな使い捨てのロケットはコスト

が高い。重たい機体の大部分は、実は燃料と酸化

剤。空気が十分にある高度十五キロぐらいまでは、

航空機のようなジェットエンジンで行き、ロケット

トエンジンに切り替えた方が合理的です。

そこで、二つのエンジンを一緒にしてしまおう

というのが僕の発想。シ

エットとロケットという二つのモードを切り替

える仕組みを考案し、二年前に特許を取りまし

た。これは、発明家の父が研究していた「パルスジ

宇宙への夢を語るP Dエアロスペースの緒川修治社長 名古屋市緑区で

エット」の構造を見ていてひらめいた。パルスジ

エットは簡素な造りが特徴で、第二次世界大戦で

ドイツのミサイルなどに使われた後、エンジンと

しては廃れてしまった。

名古屋市緑区有松にある実家のガレージで父が

いろいろな実験をするのを、小さいころから手伝

っていました。僕はもと

もとパイロットが夢だったけど、結局は造る方

道へ進みました。

三菱重工で航空機の開発に携わった後、東北大

大学院で三十歳までエンジンの研究に取り組ん

だ。そのころ、米国では民間企業がロケットを造

る機運が高まっていて、大いに刺激を受けました

ね。

起業から七年がたち、相変わらず資金面では大

宇宙旅行 米ヴァージン・ギャラクティック社は独自に宇宙船を開発。1人25万ドルの料金で乗客を募り、高度100キロ以上の宇宙空間に達する弾道飛行中に、数分間の無重力状態を体験してもらう計画を立てている。試験飛行の到達高度を徐々に伸ばしており、発着点となる「宇宙港」も建設中。従来の宇宙開発は国家主導で進められたが、2000年ごろから米国を中心に民間資本の参入が活発になった。

変だけど、いろんな人が応援してくれるつながりができてきた。

今の目標は、二〇年の東京五輪までに有人飛行を実現すること。自分が開発したエンジンを積んだ機体を飛ばし、五輪の開会式に宇宙からの映像を中継できたら。そんな想像を膨らませています。

「往還機」で夢を現実